

「一神教」という言葉の起源と用法に関するノート

Note sur l'origine et les usages du terme « monothéisme »

E.ティエンヌバリアル 訳・柿並貞佑

Étienne Balibar / trans. Yosuke Kakumai

今日、神学や宗教史、さらには哲学といった分野における著作^{三三}は「一神教」というカテゴリーをよく利用しているが、その起源を指し示してはいない。この沈黙は複雑な歴史的問題を覆い隠しているので、私はここでその大まかな特徴を指し示してみようと思っている。

まず、「一神教」という用語がもっぱらギリシア・ラテンの伝統に属しているのを見ておこう。なるほどイスラームはずっと以前から唯一なる神の真の宗教と称している。しかしこの信仰告白(シヤハーズ)はアラビア語では別種の言葉遣いとなされている(この言葉遣いは今日では西洋化したイスラーム神学者たちによつて「一神教」という視点から訳されている。とりわけタウヒード——文字通りには「一つにする」という語がそうである)。そしてこの告白は主として断定的な言表行為の形

(例えば *La ilaha ilāh Allāh*、つまり「神の他に神はなし」という形だが、これは神自身の言表にも適用される。「私は自らの罪を悔い改める者をつねに思いなおす者」……)汝らの神はただ一つの神! その他に神、慈悲深き者はない……「クルアーン」二二六〇—一六三「コーラン」井筒俊彦訳、岩波文庫、一九六四、上四〇頁。あるいはまた「私^{アッラー}は神なり、私の他に神はない」「クルアーン」二二〇四(中二九九頁)という形である、あるいは、反論と禁止の形をとるが(神は自らが他の何者かと並べられることをゆるさない「クルアーン」四二二六(上三三三頁))、普遍的な記述的カテゴリーを用いるわけではない。ドゥニーズ・マツソンが記すところによれば「クルアーンは *ashshakā* という動詞とその名詞化された能動分詞の複数形 *mushrikān*) を用いているが、この語が意味するのは、たんに「へと何かもしくは誰かを関連させ

る[*associer*]」と「一つ」ことである。たとえばこの語は、神に對して神と「同列に置かれた者たち」[*associés*] を与える人々や、唯一の(神)のすぐそばに偽の神々 (*shuraka*)、文字通りには「関連させられた者たち」[*associés*] を配置し、唯一の(神)を崇拜するべきであるのに偽の神々を崇拜する人々に関して用いられる。——したがって *mushrikān* は「多神教徒」と翻訳されるのである……)。シャックベルクは同じ *mushrikān* という語を「関連させる者たち」[*associants*] と訳している^{三四}。ユダヤ教やキリスト教と抗争しつづも類似していることを述べる際にイスラームが引き合いに出すのは、「一神教」というよりはむしろ啓示という事実(啓典)であり、とりわけアブラハムに始まる共通の系譜なのである。「われわれは、神を信じ、われわれに啓示された(アブラハムに、イサクに、ヤコブに、そして「イスラエルの二二

支族に啓示された)ことを信じる。モーセとイエスに与えられたこと、預言者たちが彼らの主から与えられたことを信じる。われわれは彼らの間に差別をもうける(と)なへ、^{アッラー}神に服従するのだ」(「アルアーン」二二:三六(上三五頁))。ム

ハンマド——本来の意味での「神」の使徒、また預言者たちの系譜全体を完成する者(預言者たちの封印「クルアーン」三三:四〇、中二九四頁)であり、またスーフィーのなかには彼が創造の瞬間につねに、すでに、神によつて生み出されたと考ええるに至った者もいる——、このムハンマドに対する神の関係の特異性をいかに定義するかという点においてこそ、おそらくは、キリスト教において「一神教と呼ばれること」になるものとの収束点が最も明瞭に描き出されるのだ。ただしイスラームにおいてそれが「一神教」という言葉で指し示されているわけではない^{三四}。

これに對し近代のユダヤ教は、「一神教と多神教の概念をそれぞれ *emounah beel ehad* (字義通りには「なる神への信仰」と *avodat elilim* (字義通りには「神々の崇拜」つまり偶像崇拜)と「翻訳する」が、どちらもトラーヤタルムードの表現ではない。シエマ(朝と夕方の方の礼拝時に行なわれる祈り)ではまず「申命記」の一節が朗読される。「聴け、イスラエルよ。YHWH」(「復唱の際にはヤハウェの代わりに「アドナイと発音される」^{三四}我らの神である YHWH はただ一つである!